

**福田雅之助史**  
**～ 早大庭球部に根付くテニス思想 ～**  
**The history of Mr. Masanosuke Fukuda**  
**～ Thought that takes root in Waseda tennis club ～**

1K06B226

指導教員 主査 石井昌幸先生

矢竹 里美

副査 寒川恒夫先生

【はじめに】

早稲田大学の庭球部は今年、大学王座で史上初の男子5連覇女子4連覇という偉業を達成した。「当事者」である私はその強みとして、庭球部員たちだけでなくOBやOG、そして今や日本一となった早稲田スポーツで活躍する多くの人のこころの支えとなっているのは、「この一球」の精神だと感じた。早稲田大学庭球部は2010年に創立108年を迎えることになる。日本テニス史でも早稲田スポーツ史でも決して欠けることのできない、伝統ある存在となっているのだ。庭球部に根付く「この一球」という共通精神は、いかにして生まれたのか。その精神の真髄を知るために、この教えを説いた福田雅之助の人物史を思想面から理解したい。

【第1章 テニスプレイヤー時代】

福田雅之助は1897年に生まれ、小学5年生のころにテニスを始める。当時は軟式のボールを使用していたが、1920年には硬球を使用ようになる。また同年には日本庭球協会の設立の準備がなされる様になり、1921年には日本が初めてのデ杯参加を果たした。このように日本でのテニスが確立されてきた時代の中、福田は24歳ながらテニス観戦の記事を書くようになる。また1922年には第1回全日本選手権で優勝、そして1923年からデ杯選手に選出されるようになる。福田がテニスプレイヤーとしてのテニス界をリードした時代である。

【第2章 師に出会い、学ぶ】

次々と著書を出していく福田だが、福田の中でのスポーツ観や思想がつくられたのは、多くの本や経験から師とする人を見つけては吸収していったからだと捉えられる。恩会津八一先生や詩人口パート・ウィニング、そして海外の試合でジョンストンやチルデンといった名選手を目の当たりにすることで、自らの使命を感じるようになった。テニス界に何か残そうと、教えを説き始めるきっかけとなった時代を追う。

【第3章 教えを説く】

戦時中でも、テニスを続けている国民を励ますために、「テニス」の刊行や《ローンテニス》誌などへの連載を続けた。さらに福田は筆を持ち、スポーツの必要やテニスの意義を説いた。国がどんな状況においても、福田のぶれることのない信念であるスポーツ観やテニス観が見受けられる。

【第4章 生涯テニスの人生】

戦後は本の刊行や雑誌への連載、筆で書物をするだけでなく、デ杯監督や早稲田大学庭球部の監督として、指導者を務めた。しかし早稲田大学庭球部の部員だけでなく他校の多くの選手にもアドバイスをするなど、庭球部を通して自分のテニスの心を多くのテニスプレイヤーに伝えてほしいと願っていたようである。

【終わりに】

坂井利郎前監督と土橋登志久監督にも話を伺い、「この一球」の精神が引き継がれていることを明らかにした。この精神で強い自己を持つことで、精神的にも自立していくことができるのだと、「当

事者」である私も感じている。福田が日本テニス界の万人に説いたように、今後はスポーツ界だけでなく社会全体に伝え、メンタルを強くもてる人間を育てていくべきである。そのことを伝えるためにこそ、早稲田大学庭球部は伝統を守り、さらに存在感を強めていく必要があるのだ。